

夷隅町新聞

昭和41年7月1日発行

学校物語 (国吉小の巻16)

～吉野校長の雄弁～

余 木 令 一

この学校の
でも校長の訓
辞は重みがあ
り、式場にお
ける場合は生
徒をして、い
つそう緊張せ
しめるもので
ある。吉野先
生にあつては
その上、惚（
は）れはれす
るような歯き
れのよい美声
と、もつて生

れた話術のたくみさが決定的に作
用するので、その効果はますます
高まるのであつた。

ところで生徒が最も感奮興起し
た先生の名演説は明治三十六年三
月統合第一回目の卒業式に於ける
訓辞であつた。

「……ここ国吉は夷隅郡の中央
に当る。この地にはそのむかし上
総の国をおさめた国府までおかれ
たのである。このようなりつばな
歴史をもつよい土地に生をうけ、
住み、且つ学んだ皆さんは、この
ほこりを十分に自覚し、わが国吉
町の名譽をけがさぬよう、そして
さらに大にしては国家のために何
事でもなし得るような、すぐれた
人となるようつとめなければなら
ない……」という意味のものであ
つた。

即ち国吉町の特質を或いは地理
的に述べ、或いは歴史的に論じて
委曲をつくし、学窓を出る生徒に
一段の奮起をうながしたものであ
つた。内に烈々たる気概をもつて
いただけにその雄弁は熱氣を帯び
ていたが、また諄々（じゆんじゆ

ん）と説く師のペースをくづさず
満堂をして最後まで「しゅーん」
とさせた。聞き入った生徒の一人
一人が、ながくながくそのときの
印象を消すことができないほど感
動的なものとなつた。

(註) 国府とは、むかし上総と
か下総とかいうような国々にお
かれた地方行政の役所があつた
所で、今日の社会で強いていえ
ば県庁のようなものと考えてよ
いだろう。

明治の初期にアメリカ人クラ
ク博士が北海道の札幌で農学校を
ひらいた。幾年か経営したのち、
ここを辞することとなつた。校門
をあとに博士は駒にまたがったま
ま、しつしつと去つていった。見
送る生徒は愛惜の情に堪えず、そ
ろそろとそのあとを慕つてついて
行つた。されど道は遠く、いつ果
てるともわからなかつた。

登り坂にさしかかつたときだつ
た。かくてはならじと博士は駒を
とめ、ふり返つて生徒に向い、重
ねて告別の辞を述べた。有名なポ
イズ、ピ、アムピシヤス(青年よ
大志を抱け)と絶叫したのは、こ
のときの言葉のひとつふしたつた
と伝えられている。時と所はちがう
けど、後々までも偉大な感化をあ
たえたことは両者その抜(き)を一
にする。吉野校長の訓辞はクラ
ーク博士のその小型版といつて
もさしつかえなからう。

〇の申し告所の

X
〇
X